以降は「紛争後」の政治であり，暴力が使用される場面はほとんど登場しない．同じく民主化後の政治・経済構造と地方首長選挙に着目し，地方における寡頭制支配の形成を指摘する Hadiz［2010］などの議論にも十分対抗しうる内容を本書は備えている．

では，暴力のあとのインドネシア地方政治には何が来るのか．本書は資本（カネ）の他に，州にまたがる広範なネットワークの重要性を指摘している．近年のカリマンタン政治はさらなるヒントを与えてくれる．前述のシャウカニ失脚から 3 年後の 2010 年，娘のリタ・ウィドヤサリが弱冠 36 歳で同じクタイ・カルタヌガラ県知事に当選した．彼女は「反汚職」を掲げ，「全国最優秀県知事賞」を受賞するなど，悪名高い父親とは対照的な政治家像の形成に成功しているようである．西カリのカプアス・フル県知事選後の暴動（p. 199）の首謀者と指摘されたアキル・モフタルは，その後憲法裁判所長官まで登り詰めたが，2013 年に中カリを含む複数の地方首長選をめぐる汚職で逮捕され，終身刑を言い渡されている．この事件の余波は中央政界も揺るがしている．鍵となっているのは政治的手段としての「反汚職」である．直接選挙の導入と SNS などを含む新旧メディアが地方まで浸透しつつある条件におけるエリート間の競争の激化は，汚職の取締りが恣意的に運用されるような政治を継続させる一方で，各地で改革派の首長を誕生させ，ときに市民社会の要求実現を可能にしている．さて，シャウカニの娘は，あるいは「成り上がり」コーネリスの後任はどうなるのだろうか．早くからカリマンタンの政治に目をつけていた著者による続編に期待したいところである．

引 用 文 献

Hadiz, Vedi. 2010. *Localising Power in Post-Authoritarian Indonesia: A Southeast Asian Perspective*. Stanford: Stanford University Press.

本名　純．2013.『民主化のパラドックス―インドネシアにみるアジア政治の深層』岩波書店．

岡本正明．2015.『暴力と適応の政治学―インドネシア民主化と地方政治の安定』京都大学学術出版会．

杉島敬志編.『複ゲーム状況の人類学―東南アジアにおける構想と実践』風響社，2014 年，382 p.

山口亮太 *

本書は，杉島が提唱する「複ゲーム状況」について，東南アジア各地のフィールドの事例から検討と分析を行なうものであり，本書の執筆者たちによって 2009 年度から 2011 年度にかけて行なわれた共同研究の成果である．

本書のキータームとなる「複ゲーム状況」については，杉島［2008］に詳しい．複ゲーム状況とは，「両立しえない規則／信念が同時並行的に作用する事態」［杉島 2008: 2］である．近年の人類学では，無時間的な社会構造や体系的統合体としての文化や社会を描いてきた反省から，混交や変化が中心的

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

なテーマとして注目されてきた．しかし，混交には，料理のように混交が行なわれていることが意識されることもないような「通常混交」や，穢れとも関係が深い，別種の分離しておくべきものがミックスされている「分類混交」と，杉島が複ゲーム状況と呼ぶものの，少なくとも 3 種類の事態が混同して議論されてきたという［杉島 2008: 15］．さらに杉島は，たとえ混交や変化が注目されたとしても，「体系」のイメージをともなう複合体としての社会や文化の概念は保存されていると指摘する［杉島 2008: 15］．

フィールドでみられる，複雑に絡まり合い，しばしば相矛盾する人びとのさまざまな行為や言説を，文化や社会といった統合的全体に還元せず，かといって全てをポストモダン的な構築物として断片に分解しつくすことも拒否するならば，人びとの生活をどのように提示し，分析を行ないうるのか．本書が目指すのは，このような人類学的な対象理解の刷新である．

本書はそれぞれ複ゲーム状況論の根幹をなすタームを冠した 3 部からなり，その構成は以下のとおりである．

序論　複ゲーム状況への着目―次世代人類学にむけて（杉島敬志）
第一部　不定見者
　第一章　フィリピンの都市移住者コミュニティでみられる複ゲーム状況（細田尚美）
　第二章　北部タイ農村地域における医療をめぐる複ゲーム状況（飯田淳子）
　第三章　バリにおける慣習村組織の変化とその非全体論的解釈（中村潔）
第二部　カプセル化
　第四章　ゲーム間を開拓する―フィリピン地方都市，呪術・宗教・医療の複ゲーム状況から（東賢太朗）
　第五章　ピーの信仰をめぐる複ゲーム状況論（津村文彦）
　第六章　マレーシア・イスラームにおけるハラール実践―複ゲーム状況という視点から（多和田裕司）
第三部　ゲーム外状況
　第七章　複ゲームとシンクレティズム―東南アジア山地民ラフの宗教史から（片岡樹）
　第八章　土地をめぐる複ゲーム状況―台湾・ブヌン社会の事例から（石垣直）
　第九章　グローバル化するエンジニアリングの複ゲーム状況と人類学（森田敦郎）
　第十章　東インドネシアにおける狡知と暴力を理解するための複ゲーム状況論（杉島敬志）

次に内容を概観する．

第一部「不定見者」では，「両立しえない規則／信念をともに受け入れるが，択一的に奉じることのない多数者」［杉島 2008: 4］である不定見者に注目した 3 本の論文が収録されている．

第一章の細田論文では，フィリピンのマニラ市を舞台に，親族間の「助け合い」を規範

とする富の分配（相互扶助）と自助努力をめぐる複ゲーム状況が描かれる．都市に住む成功者は相互扶助に基づいて親族を助ける一方で，経済的な依存関係の成立を注意深く避け，自助努力の大切さを説くという，複ゲームを状況ごとに使い分けている．直接その利益をうけない多数の村人たちは，不定見者として，成功者による富の分配が妥当かどうかを判断し，彼らへの態度を変化させる．

第二章の飯田は，混交や変化に着目する近年の医療人類学においても，体系や複合体としての文化のイメージは維持されていると指摘する．北タイの農村と病院における健康や病をめぐる事例からは，むしろ，伝統的／近代的医療従事者らがもつ，出自の異なる規則‐信念の対立が浮かび上がり，それらは並存しているが統合されることはないことが示される．そして，病の当事者たちや医療従事者たちでさえ，それぞれの信念を択一して抱懐することのない不定見者として振る舞うこととなる．

第三章の中村論文では，インドネシアにおける地方分権化の流れを軸に，バリ島東部の慣習村における組織改編と，一般村民や高学歴の村外居住者が慣習村運営に参与していく中で起こる，都市で教育を受けた「近代派」と「伝統派」の「慣習」をめぐるせめぎ合いに焦点が当てられる．両派の対立は解消しえないかのようにみえるが，実際にはどちらも伝統や近代を択一的に奉じることのない不定見者として状況に参与していることが示される．

第二部「カプセル化」では，「両立しえない規則／信念の一方による他方の被覆」［杉島 2008: 9-10］とされるカプセル化に着目した 3 本の論文が収録されている．

第四章の東論文は，フィリピン地方都市における医療・宗教・呪術の並存状況に注目する．呪医は，多数派であるカトリックからは異端視され，近代医療からは偽医者との烙印を押されるが，敬虔な信者であり医療における正統な知識をもつことを主張し，それら権威に積極的に被覆されることによって当座の活動を可能としている．このような，弱者によって維持されるカプセル化は「いわゆる『抵抗』とは異なった形での弱者の生存戦略の一形態」（p. 167）であると主張する．

第五章の津村論文は，タイの精霊信仰と仏教を取り扱う．仏教と精霊信仰にまつわる諸々の規則‐信念群は往々にして葛藤状況を生じるが，それによる危機的状況を回避するための新たな規則‐信念の創造が権威者によってなされる．これを津村は「媒介項の挿入」と呼び，これによって，互いに相容れない規則‐信念群の状況に応じた運用が可能となり，仏教‐精霊信仰の複ゲーム状況は破綻することなく維持されてきたと指摘する．

第六章の多和田は，マレーシアにおいて産業化が推進されるイスラームのハラール実践に着目する．マレーシアの食品・飲料産業に参与する企業の 7 割を非ムスリムが占めるが，人口の 6 割以上を占めるムスリム系住民を顧客として獲得するためには，政府の定めるハラール認証制度に通る必要がある．このため，イスラームとは異なるゲームを行なう非ムスリムが，マレーシアのイスラーム化

を加速させるという逆説的な状態が発生している．

第三部「ゲーム外状況」では，「複ゲーム状況をとりまき，そこに出自や経緯の異なる規則‐信念を登場させる背景的な諸事態」（p. 11）であるゲーム外状況に注目した4本の論文が収録されている．

第七章において片岡は，宗教現象やポストモダン的な文化一般を対象としたシンクレティズム論では，複数の宗教的伝統の競合・緊張関係を主題化することはできないと指摘する．タイの山地民ラフにおける，至高神と精霊をめぐるせめぎ合いと，キリスト教諸派の宣教による在来宗教のカプセル化の諸展開に着目し，リーチの「儀礼の文法」論と対比させつつ，そこから抜け落ちているさまざまな歴史的動態を議論の射程におく複ゲーム状況論の可能性を示唆する．

第八章の石垣論文では，台湾のブヌン人による土地と狩猟権に関わる諸実践が，日本軍による植民地化と強制移住，皇民化政策をへて，戦後のキリスト教化と権利回復運動の時代に至るまでに，どのように変化してきたかが論じられている．その中で，石垣は，従来の単線的な歴史理解を批判し，さまざまな要素が混じり合いながら社会が変化していく累積的歴史観に基づいた記述のための複ゲーム状況論の有効性を論ずる．

第九章の森田論文は，タイにおける日本人技術者と現地の技術者のあいだの技術移転を題材としているものの，その二者関係に人類学者である森田自身も含め，複ゲーム的な状況を自らも増殖させながらそれに寄生的に学知の生産を行なうという，人類学そのもののあり方を問う．グローバル化の進展とともに還元主義的な傾向をみせる現代社会において，異なる実践が緊張をはらみながら並存せざるをえないことに人類学者は意識的であるべきだと森田は説く．

第十章の杉島論文は，東インドネシア，フローレス諸島の歴史と民族動態を取り上げる．祖先や与妻者などが子孫や受妻者などの栄枯盛衰を決定するという「因果秩序」と，狡知と暴力による先住者の支配を確立しようとする「実力主義」の複ゲームは，奴隷交易というゲーム外状況と相まって，諸王国・首長国の興亡や合従連衡を引き起こしてきた．杉島は，このような東インドネシアの歴史を，従来の研究で依拠されてきた「序列」の概念で論ずることができないとし，因果秩序と実力主義の分布とその比較を行なう，新しい歴史研究の可能性を提示する．

以上，複ゲーム状況として本書で分析の対象となった事例は多岐にわたる．その中でも，複ゲーム状況論の有効性がよくあらわれているのは，カプセル化を論じた諸論文であるだろう．両立しない規則‐信念の遭遇の結果を描いたこれらの事例は，本書に通底する，混交やシンクレティズムへの疑義と，複合体としての文化や社会のイメージへの有効な批判となっている．その極北は，人びとが全く異なる規則‐信念に基づいて行動しながらも，事態は支障なく進展するというケースである．片岡が論ずる，キリスト教の布教の際に発生した，布教する側とされる側の双方が，相手の活動を自らの枠組みで理解したと

いう「幸せな誤解」がそれである（pp. 252-257）．この事例は，従来であればキリスト教の土着化という視点で分析され，双方の「ズレ」そのものは対象化されなかったに違いない．

一方で，不定見者の扱いには難しさがつきまとう．そもそも，われわれの生活には無数の規則‐信念があふれており，われわれがその全てに定見をもつことはありえず，その必要もない．また，本書の各論が示すように，専門家や権威者でさえ，不定見者として振る舞うことがありうる．ならば，ある人物がある瞬間に何らかの定見をもっているかのようにみえるのは，そのときにその人物がおかれた立場や人間関係，文脈，その場における相対的な知識の過多などに起因するのだ．このような個別・具体的な瞬間において，ある規則‐信念群は両立しえないものとして立ち現れてくるのではないか．杉島があげる，大学教育におけるカネ派と時間派の対立（pp. 10-11）も，実は必然的なものではない．カネは大事であるし，時間も大事なのだ．しかし，大学を取り巻くゲーム外状況の変化と，教員たちが行なうコミュニケーションによって，それらはあたかも両立しえないかのように配置されてしまう．本書で取り上げられたのは，すでに固定化された複ゲーム状況が主であったが，相反することが自明ではない規則‐信念群が複ゲーム状況として定位されているケースもありえるだろう．今後，複ゲーム状況が生起する場面におけるコミュニケーションにより踏み込んだ分析が行なわれることを期待したい．統合的全体としての文化や社会のイメージを批判し，混交やシンクレティズムについての議論を精緻化・相対化する複ゲーム状況論は，人類学を志す全てのものにとって必読であるだろう．

引 用 文 献

杉島敬志．2008．「複ゲーム状況について―人類学のひとつの可能な方途を考える」『社会人類学年報』34: 1-23.

Ferdinando Sardella. *Modern Hindu Personalism: The History, Life, and Thought of Bhaktisiddhānta Sarasvatī*. New York: Oxford University Press, 2013, xiii+342 p.

間　永次郎 *

19-20 世紀転換期のベンガル社会で興隆した近代ヒンドゥー教運動は，しばしば「ネオ・ヴェーダーンタ」のアドヴァイタ思想によって代表されてきた．このことは，ヴィヴェーカナンダやオーロビンドなどのベンガル出身の著名な宗教家たちの思想が，後世に及ぼしたグローバルな影響を考慮しても，自然な成り行きであったといえるかもしれない．しかしながら，インドの独立後，60 年代に入るまで，国内外でほとんど忘却されてきたひとりのベンガル人宗教家が説いた独特の神学的人格主義（personalism）が 20 世紀後半以降，西洋人を取り込んだ世界最大規模のヒンドゥー教組織のひとつである「ク

* 一橋大学大学院社会学研究科